

熊内八幡神社 熊内町9丁目

●「熊内町（くもちちょう）・熊内橋通（くもちばしどおり）」の由来



旧熊内村の氏神で、応神天皇と彦火々出見尊（ひこほほでみのみこと）を祭神とする。この神社の創建についてはいくつかの説がある。文武天皇の時代、滝勝寺建立の時、寺の鎮守として創祀し、その時に祭神の一つ彦火々出見尊を祀ったという説や、後鳥羽上皇の時だという説もある。また、永禄年間にこの地の名族中西家の祖、加賀美（かがみ）二郎が創建したともいう。なお、荒

木村重が織田信長に反旗を翻し乱を起こしたとき（1579<天正7>年）、滝勝寺とこの神社が焼かれ、その後復興した。しかし、1889（明治22）年火災にあい、一時二宮神社に合祀されたが、1902（明治35）年に氏子の手で元の場所に再建された。

境内には、湊川の戦いで敗れた新田義貞が京へ逃げ帰る途中この地で鎧を脱いで休んだと伝えられる「新田義貞鎧かけの松」（現在は二代目の松になっている）や「悲秋碑」と言われる俳人・窓雨の「秋はけさ来にけり松のうしろより」の句碑（写真a）、1957（昭和32）年に建てられた中西家の末裔・中西為子の歌碑「砂子山よぎりのはれてちぬの海のなみよりいつる月をみるかな」（写真b）、そして、「左 住吉道 右 瀧」の道標（写真c）がある。

また、境内にはかつて中西家にあった茶亭の一つ「香字庵」を偲んで建てられた六角堂があった。江戸幕末の中西家の当主は誉左衛門重之（前述の為子はこの重之の長女）といい、勤皇の志を抱いていたため、九州大村藩士の松林飯山や天誅組副総裁の松本奎堂などが彼の屋敷に出入りしていた。前記の「香字庵」は松林飯山の命名である。前述の「悲秋碑」は、一説によれば、1863（文久3）年の天誅組の変で自刃した松本奎堂を嘆き悲しみ、中西重之が読んだ句で、俳人窓雨は世をはばかった彼の変名だとする説もあるが定かではない。

阪神大震災で倒壊した正面の鳥居は2000（平成12）年4月に再建された。また、境内本殿西側には同月29日に建立された「震災の碑」があり、震災で倒壊した玉垣に刻まれていた氏子などの誌名が記されている。

ところで、「熊内」という地名の由来であるが、昔、神を「クマ」と読み、熊内とは神内という意味で、生田神社が砂山の上にあったときの神域からつけられたものと言われている。また、布引橋を戦前に熊内橋と呼んでいたため「熊内橋通」の町名がつけられた。

場所：熊内町9丁目2-18

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

熊内八幡神社 熊内町9丁目



(a) 悲秋碑



(b) 中西為子の歌碑



(b)道標